

# 国立 千葉大学

プログラムの名称：双方向の多様な場づくりによる学生総合支援

-- ふれあいの環の多面的展開を通しての「総合的人間力」の涵養

プログラム担当者：副理事 宮野 モモ子

キーワード

1. ふれあい 2. 双方向 3. 総合的人間力 4. ピア・サポート

## 1. 大学の概要

千葉大学は、文学部、教育学部、法経学部、理学部、医学部、薬学部、看護学部、工学部、園芸学部の9学部。また、大学院は、学部の教育・研究を基礎として、教育学研究科、理学研究科、看護学研究科、工学研究科、園芸学研究科、人文社会科学研究科、融合科学研究科、医学研究院、薬学研究科、医学薬学府、専門法務研究科が設置され、附属図書館、医学部附属病院の各部局及び各センター等で構成されている。

現在、学部学生の入学定員は2,350名、収容定員は9,810名である。

また大学院研究科入学定員は、博士課程272名、修士課程926名、専門職学位課程50名で収容定員は2,898名であり、総合大学としての規模、内容とも新制国立大学の上位にある。

中期目標として、グローバル化・多様化する21世紀社会の要望に応えるべく、総合大学として、文理融合の理念に基づく学際的な教育研究を推進する。大学院において、世界的な教育研究拠点を形成し得る分野を重点的に育成し、近隣の教育研究機関との連携により、その高度化を推進するとともに、高度専門職業人を養育する。学術や先端的ビジネス等の多くの拠点や国際空港に近隣する立地条件を存分に生かし、地域社会及び国際社会に開かれた大学として、産官学連携及び国際交流を推進し、世界的な「知の拠点」を形成する、を掲げている。

## 2. 本プログラムの概要

学生支援は、単なる学生へのサービスではなく、学生の教育・研究活動をより一層充実したものにするために欠かせない活動である。「千葉大学憲章」並びに「千葉大学行動規範」に明記されているこの理念に準拠し、この学生支援プログラムでは、学生たちの学生たちによる

ピア・サポートや自律的活動に基づく「総合的人間力」の習得に向け、これまでに実施してきた様々な学生支援活動を総合的・有機的に結合して双方向に展開するために、「ふれあいの環・学生総合支援センター」を創設する。そのセンターでは、学生と学生とがふれあう環、学生と地域市民がふれあう環、学生と卒業生がふれあう環、学生と教職員がふれあう環の四つの位相を学生主導で展開するとともに、それらのふれあいを教育・研究の基底に位置づけ、学生たちの自律的で総合的な人間形成に寄与することを目指す。

## 3. 本プログラムの趣旨・目的

千葉大学では、「大学憲章」や「行動規範」において教育の理念として学生の自律的成長の促進をうたっており、学生支援においてもその理念に基づき具体的な目標が設定されている。この目標をより効果的に促進するためには、これまでの学生支援をベースにしながら、学生同士が支えあうピア・サポートの仕組みをさらに充実すること（学生と学生がふれあう環、学生と教職員がふれあう環）が重要である。学生が学生を支えることが、自己成長を促し、人間形成の基礎を築く。学生は、教職員とともに大学を構成する重要な人的リソースであり、単なる顧客ではない。学生が主体的に学生支援に関わり、自分たちの手で自分たちの学習環境を改善する能動的な役割を担うことが、大学教育の改革を推進させ、学生のニーズに即した学習の場としての大学の実現を可能にする。

さらに、学生の学習は大学内で完結するわけではない。とりわけ核家族のなかで成長し、受験勉強で社会との接点を持たないまま大学に入学してきた若者たちに、世代間交流や地域社会との連携を経験させること（学生と地域市民がふれあう環、学生と卒業生がふれあう環）は何よりも彼らの社会適応能力を促進させ、彼らのキャリア形成に有益である。社会のなかでどのよ

## 事例5 千葉大学

うな知的基盤が求められるかという経験が大学での学習にフィードバックされ、それが新たな学習の動機付けになる。学生支援においても、いかにして社会との接点を実現するかが課題になる。

そのために、本プログラムにおける取組では、学生支援活動の全体を統括する「ふれあいの環・学生総合支援センター」を設置し、学生、卒業生、地域市民、教職員が協働しつつ、学生と学生、学生と卒業生、学生と地域市民、学生と教職員が双方向に支え合いながら、ともに自己成長する場を形成し、世代間交流、地域交流、異文化交流といったキーワードを交えながら、学生の主体的な学習能力の向上に資する学生支援、学生自身の自律的な自己成長を促す学生支援をさらに充実・展開する。同時に、学生支援を通して地域と大学の連携を強化する。

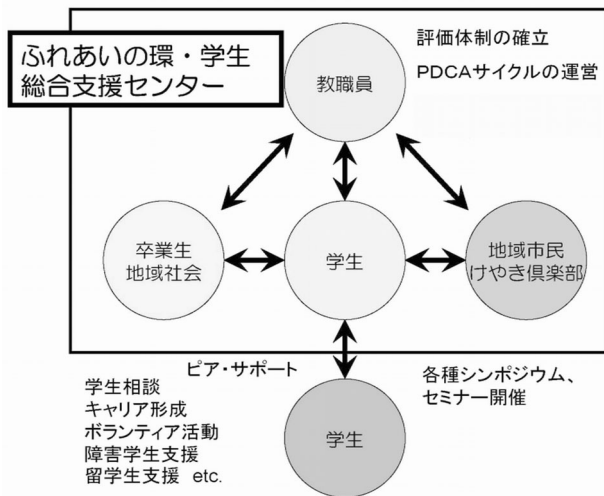


図1 ふれあいの環・学生総合支援センター

### 4. 本プログラムの独自性(工夫されている内容)

#### (1) 学生と学生がふれあう環

学生が学生を支援するピア・サポートはこの数年で全国の大学に急速に広まり、日本学生支援機構の調査(2005(平成17)年度)では、対象校のうち、国立大で33.3%、私立大で11.0%の大学がこのシステムを導入している。

千葉大学でも、上級生が下級生に学習上の助言を与えるピア・ルームが開設されており、新入生にとっては上級生との語らいが新しい大学生活への移行を円滑にするなど、大きな成果を得ている。

「ふれあいの環・学生総合支援センター」では、この経験を生かし、学生同士にふれあいの場を提供すると同時に、そのふれあいを通じて、本当に欲しい情報は

## 学生同士で話してみよう!!

ランチを食べる場所を探している人、話し相手がほしい人、いろんな友達を作りたい人、他分野の方と話してみたい人、一息つきたい人、etc...

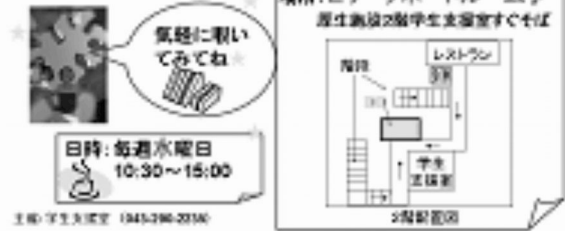


図2 ピア・サポート

何か、獲得したい、あるいは、獲得しなければならないスキルや知識は何かといった学生自らのニーズを認識し、学生が主体となって、キャリア形成サポート、ボランティア活動サポート、障害学生修学サポート、留学生修学サポート等において、ニーズに即した活動を展開する。

#### (2) 学生と卒業生がふれあう環

学生にとって、卒業生は、自分たちより一歩先に様々な社会との関わりを体験している先輩である。また、同じ「同窓生」であるという親近感も強く、彼らがどのような大学生活を送って今日に至ったのかなどへの興味も大きい。機会があれば後輩に自分たちの経験の話したり、就職の相談にのったりしたいという卒業生も少なからずいる。「ふれあいの環」では、卒業生もピア・サポートの一員として、学生支援に参加するシステムを構築する。

なかなか大学に足を運べない卒業生に対しては、ヴァーチャルな環境での学生支援も効果的に活用する必要がある。これには、現在千葉大学校友会(同窓会)で、卒業生・在職経験者・在籍者(学生、教職員)の相互交流を活性化し、千葉大コミュニティの構築と拡大を図るために立ち上げたSNS(ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス)「Curio(キュリオ)」を活用する。この「Curio」内に学生支援のコミュニティを創設し、インターネット上の学生支援システムを構築して、今何が社会的な課題となっているかといった社会的ニーズをキャッチする公の情報交換の場として、卒業生と在校生との情報交流の強化を図るとともに、今後の交流の多様化を実現していく。

#### (3) 学生と地域市民がふれあう環

大学周辺の地域市民との直接的・間接的な交流は、



図3 留学生と地域社会との交流活動

学生にとって、社会性を学んだり、異なった世代と触れあったりする大切な機会である。「ふれあいの環」では、地域市民もピア・サポートの一員として、学生支援に参加するシステムを構築する。

ここで核となるのが、地域市民の生涯学習活動の集まりである「けやき倶楽部」(会員数213名)である。彼らにシニアスタッフとして「ふれあいの環・学生総合支援センター」に参画してもらい、彼らが具備している豊富な社会経験や知識、生活の知恵等を学生支援に活用する。

「けやき倶楽部」は1995(平成7)年に発足し、すでに10年以上が経過している。最近の事業計画でも、「大学の社会貢献、地域連携活動等への協力と活用」を挙げており、留学生修学サポートやキャリア形成サポート等でも、会員の社会経験、蓄積された知識が機能する。

高齢者とのふれあいだけでなく、附属並びに地域の小中学校生徒たちとふれあう機会を今より以上に創設し、地域の教育活動への貢献を実現する。

また、すでに実施されている地域ボランティアによる留学生交流を活発にし日本人学生も加わった事業を活性化し、地域における異文化交流に貢献する。

#### (4) 学生と教職員がふれあう環

大学には、多くの教育を担当する教員、様々な運営事務を担当する職員が働いている。大学において学生が最も頻繁に交流する社会人は、これらの教職員である。「ふれあいの環」では、教職員もピア・サポートの一員として、平等の立場で、学生支援に参加するシステムをより一層万全なかたちで構築する。

千葉大学における「学生支援機構」のいくつかの企画室においては、すでに、教職員と学生との協働的運

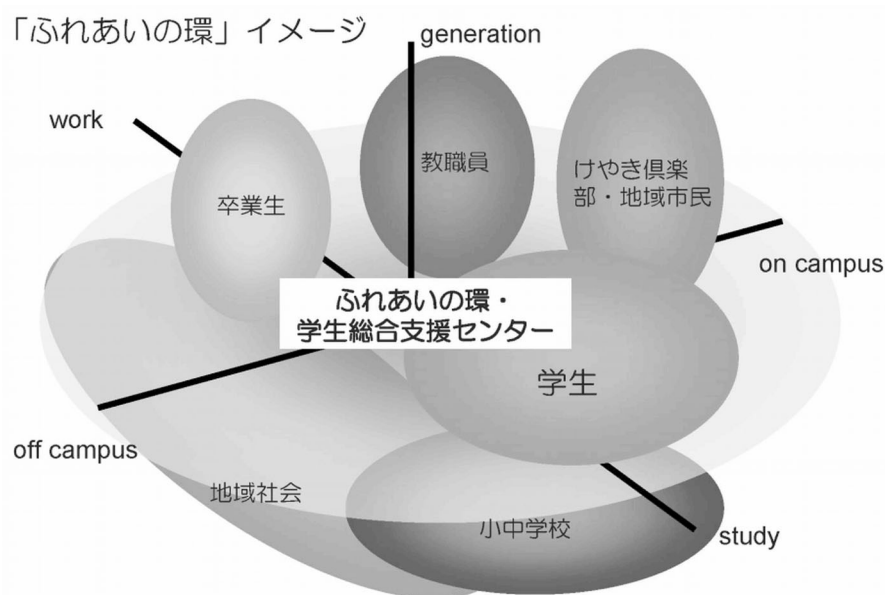


図4 「ふれあいの環」イメージ

事例5 千葉大学

営体制が実現している。授業や研究活動以外で学生と教職員がともに考え、語り合い、分担し、行動することは、大学教育を支える根本的な営みである。この4つのコンセプトを学生と教職員との新たな「ふれあいの環」で実現する。大学の運営に学生が加わることで、大学を構成するすべての人のみならず、地域住民にとってもより快適なキャンパスの構築が可能となる。

(5) 「ふれあいの環・学生総合支援センター」と普遍教育の連携

千葉大学では、学生支援は、単なる学生サービスではなく、本来の教育活動の基幹として位置づけている。その意味において、正課外活動である学生支援と正課授業とが連携することは重要である。千葉大学では、すでに、学生による自転車の再利用の活動が学生企画授業（科目名「再転車と公共デザイン」など）として、普遍教育（教養教育に対する本学の呼称）で開講されている。

また、授業科目名「文化をつくる」でも、学生たち

が、千葉市や地域社会の協力を得ながら、アートの手法を用いて美術館や街・学校等で様々なワークショップを企画運営している。こうした総合的学習の意味合いが強い授業科目は、とりわけ、普遍教育においては学習効果（学習意欲の向上、専門領域への動機付け、社会的スキルの醸成、市民意識の涵養など）の点でますます重要度を増しており、旧来のディスプリンに基づく授業科目とのバランスを考慮したカリキュラム編成が必要になっている。

「ふれあいの環」の活動を通じて、学生が新たな授業の提案、学習会の企画、カリキュラム編成への提言などを積極的に行っていくことで、普遍科目がより時代のニーズにあったものへと改善され、その教育効果がより高まっていく。

(6) 「ふれあいの環・学生総合支援センター」タスクマネージメント

「ふれあいの環・学生総合支援センター」では、これまでの学生支援活動に加え、新たな事業として、地域健康づくりプロジェクトやファシリテーション講座など、学生・教職員・地域市民・卒業生の協働によるシンポジウムやセミナーを積極的に展開する。

事業の運営にあたっては、PDCAサイクルのマネージメント・システムを機能させながら、千葉大学内の学生支援活動の全体を統括する。千葉大学では、すでに、学生主体の活動として、「環境ISO学生委員会」が実績を上げている。この委員会は計画・実行・点検・改善に至るフィードバック・ループを徹底しており、PDCAサイクルのマネージメントがいかに有用であるかを実証している。

5. 本プログラムの有効性（効果）

上述のような学生を中心とした多次元での双方向交流を目指す「ふれあいの環・学生総合支援センター」を設立し、学生自身が主体的に各種の事業を企画・運営することは、学生たち自身の事業構想力、実践力の向上につながり、学生の間人形成が総合的に促進される。また、こうした取組は、学生支援に関わる学生スタッフの人材発掘、人材養成という点でも有効である。学生が学生を支援するにあたっては、支援する学生スタッフの確保が課題となる。授業のなかでその活動の社会的意味や時代的背景等について学ぶことによって関心を引き出し、ともに支え合う気持ちの芽生えが、人間力の育成につながる。学生支援と正課授業との連



図5 日本経済新聞 2007（平成19）年5月3日

携は、学生主体の学生支援の継続的な進展を保証するものであり、本学における教育活動との相乗効果が期待できる。

学生支援に、学生・教職員だけでなく地域市民・卒業生の参画を得ることは、世代間交流、地域交流、異文化交流を学生支援において促進させることになり、学生の人間形成や自律的学習への効果が期待できる。「けやき倶楽部」との協働は、高齢者と学生との世代間交流を促進し、会員の社会的経験が学生の対人コミュニケーション能力の育成や社会的スキルの習得に与える効果が期待される。

卒業生がSNSを利用して大学との関係を維持することは、彼らが大学への愛着を深めることにつながり、それが先輩から後輩へ循環的に受け継がれていくことにより、良好な先輩 後輩の関係が築かれる。部局を越えて先輩と後輩が交流を促進することは、千葉大学の卒業生としてのアイデンティティを共有することであり、目に見えない社会的効果として大学に戻ってくるものである。

「ふれあいの環・学生総合支援センター」設置という今回の取組は、世代間交流の促進、地域連携の促進、卒業生による学生支援への協力、学生による学生のための学生支援体制の確立であり、従来の学生支援で欠けていた「双方向支援」という新たな視点を持ち込んで、より充実したものに転換し、統合的な仕組みのなかで、学生支援活動を実行しようとするものである。これにより、本学における学生支援の全体を把握・整理し、何が充足し、何が不足しているのかを全学的な視点から点検・改善することが可能になる。

## 6. 本プログラムの改善・評価

現在の学生支援機構の各企画室の活動については、年度ごとに活動計画、活動レポートを作成し、本学の学内ホームページで情報開示している。それにより自己点検の機会是有しているが、いまだ評価体制としては必ずしも十分ではない。「ふれあいの環・学生総合支援センター」の事業点検・評価にあたっては、PDCAサイクルを導入し、フィードバック・ループが機能する体制で臨む。学生支援への地域市民の参画により、自己点検・評価に地域社会からの視点が投入されることになり、より複合的・客観的な評価が行われるようになる。具体的には、次の評価活動を行う。

### (1) 目標設定シートの作成

事業ごとに目標設定シートを作成する。事業計画の段階で目標を明確化することにより、PDCAのサイクルが機能するよう準備する。

### (2) 利用者アンケートの実施

学生のニーズを把握するためにはアンケート実施が必要であり、とりわけ、受益者による評価は事業の目標到達測定に不可欠である。

### (3) 活動担当者の「ふりかえりシート」作成

活動担当者は自己点検のために「ふりかえりシート」を作成する。利用者アンケートと活動担当者の「ふりかえりシート」を突き合わせることで、活動分析が可能となり、フィードバック・ループが実質的に機能する。

### (4) 「ふれあいの環・学生総合支援センター」内の評価担当グループ設置

学生だけでなく、教職員・地域市民を加えた評価担当グループを組織する。ここでは、モニター型の資料による点検・評価ではなく、コミュニケーション型の点検・評価活動を行う。活動に関わった複数の者が、相互研修の形式で、意見交換を中心に行い、次の活動への改善点について検討する。

具体的な評価項目は、単なる利用者満足度測定ではなく、目標設定とその到達度についての定量的並びに定性的な評価活動項目が軸となる。目標到達が達成されない場合は、その原因を検討し、目標設定が適切であったかどうか、活動目標が社会や学生のニーズと整合していたかどうか等について、改善すべき点を明確にし、必要な措置を講じる。

また、評価においては、社会的ニーズへの整合性や地域貢献という点で、教職員や学生だけの自己点検によらずに、より高い客観性を確保するためにも地域市民を加えた評価体制が欠かせない。具体的には、公開講座の枠を広げるかたちで地域市民への授業開放を促進し、正課授業との連携についての評価が可能となるようにする。

## 7. 本プログラムの実施計画・将来性

2007(平成19)年度は、「ふれあいの環・学生総合支援センター」設置に向けた準備期間とし、従来の学生支援活動に加え、新しく学生スタッフの確保と人材養

## 事例5 千葉大学

成を兼ねたシンポジウム・セミナー等の開催、「けやき倶楽部」と本学学生支援機構の組織構成の調整、SNS「Curio」に関する校友会との事業調整、学内・他大学・他機関での調査・情報収集に取り組む。また、「ふれあいの環・学生総合支援センター」に関するホームページの立ち上げを行い、広報活動を積極的に実施する。

「ふれあいの環・学生総合支援センター」には、専任教員並びに兼務教員を配置する。事業スタートに当たって運営に支障がないよう、2007（平成19）年度から非常勤職員2名を配置する。補助期間の終了後は、学生支援課非常勤職員1名を「ふれあいの環・学生総合支援センター」に配置替える。センター設立は2009（平成21）年度を目指し、2007（平成19）年度及び2008（平成20）年度内に設備整備に努める。一方では、従来の学生支援活動を継続させながら、PDCAシステムによる評価、活動改善を試行的・積極的に実施し、センター設置後に安定的な活動が確保できるように努

める。

2008（平成20）年度には、SNS「Curio」内での学生支援に関わるコミュニティ設立など、試行的に運用を開始する。また、シンポジウム・セミナー等を継続的に開催する。

2009（平成21）年度、2010（平成22）年度においては、「ふれあいの環・学生総合支援センター」による学生支援を着実に実行し、PDCAサイクルによる継続的な事業改善を実現する。また、センター運営に必要な設備整備により一層努める。

現在の「学生支援機構」組織は、順次、新センターに移行させ、企画室に配置された学生スタッフは「ふれあいの環・学生総合支援センター」における重要な人材として活動する。また、「学生支援機構」と並行して学生支援活動を行っている「安全総合衛生機構（健康管理）」、「国際教育センター（留学生支援）」などの代表者は、兼務教員として新しく発足する「ふれあいの環・学生総合支援センター」の活動に参画する。

### 選 定 理 由

千葉大学においては、学生支援に関して従来から目標を定め、様々な工夫を実施しており、その成果も評価できます。

今回申請のあった「ふれあいの環・学生総合支援センター」構想は、社会的ニーズを的確に捉え、そのニーズを大学の学習に生かし、さらに「知の循環装置」を作り上げるという大変興味深いものです。また、学生のニーズに対応した様々な支援への取組は、すでに多くの効果を上げており、本取組でさらに持続的なPDCAシステムを構築し、「双方向支援」という新たな視点から、学生支援をさらに推進していこうとするもので、その成果も大いに期待できます。一つ一つの企画は決して目新しいものではありませんが、従来から進められている「グランドフェロー」制度（退職した教員が、ボランティアで学生相談に応じる）・千葉大コミュニティのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）・卒業生起業家との連携・けやき倶楽部（千葉大学の学外支援組織）などの活動が、有機的に連携するための申請であり、実効性があると思料します。

本取組は、他の大学等の参考となる優れた取組であり、その成果も十分に期待できると判断します。